

師走八日の千本騒動と小原沢の名の由来

今から四百年以上前の天正十三年十二月八日、千本城せんぼの殿様常陸介ひたちのすけとその子十郎は、鳥山城の殿様、那須資晴すけはるの招きで滝の大平寺にやって来た。

これは、那須家と、千本の殿様に恨みを抱く黒羽くろばねの大関おせきたちが、千本親子を滅ぼすためのはかりごとだった。

それとは知らず、大平寺に着いた千本親子や家来の武士たちは、待ち構えていた那須家や黒羽の大関たちにより、大方切られて死んでしまった。

村の人々は何が起こったのかわからず、ただ千本と鳥山で戦いが始まったというので、大切なものだけ持って、山の中へ逃げ込んだ。

それからというもの、この辺りに住む村人は、毎年十二月八日になると、どこの家でも、子供たちに

「今日は師走八日だぞ。夕方は暗くなんねえうちにけえってこおよ」

って言ってな、早めに夕飯をすませ、家中の戸を残らず閉め切って、静かに夜をすごすようになった。

一方、千本城せんぼでは、生き残った二、三人の家来が大平寺の様子を知らせたので、大変な騒ぎになった。

「きつと、鳥山の殿様が、千本の城に攻めて来るにちげえねえ。こちらは殿様が討ち死にした今、戦いになれば防ぎされるものではねえ」

そう考え、みな散り散りに城を離れていってしまった。

この時、千本城の殿様常陸介ひたちのすけの奥方は、産み月を間近にした身重みおもの体で、家来の一人と下女一人を連れて、実家である長倉長門守のお城へ向かった。

大きなお腹を抱え、那珂川を渡り、やっとの思いで山すその木こり小屋にたどり着いた奥方は、急に産気づき、赤ん坊を産んだ。人里離れた木こり小屋、産湯うぶゆなどはねえ。仕方なく、近くを流れる谷川の水を産湯がわりにした。

土地の人々は、この哀れな話を語り伝え、誰が言うとなく、このあたりを「子洗こあらい沢」と呼ぶようになってな、やがて「小原沢」という地名になったんだ。

おしまい